PART.Ⅲ

特集　奈良ですけど。

# 奈良の光りを観る。

## ― genius loci ―

19

小園智帆（1年生）は、「奈良は日本の原点といえるだろうか」と、ぞくりとさせる問いを発した。「奈良には日本最古の都があった」からというだけで、「奈良が原点」と言ってよいのか。まず時間的原点として「飛鳥」と「飛鳥時代」を見る。最初の「律令制国家の都であり、仏教を受け入れ、発展させ始めた時代」だから、「原点」と言って良い。次に組織・機能の「原点」として総本山・総本社の「長谷寺」・「春日大社」を見る。どちらも多くの末寺・末社を擁する「信仰」の中心である。これも「原点」と言える。しかし、その他の一般に「奈良県発祥」とされているものも、「日本清酒や薬」などの一部以外は、根拠や信憑性の不確かなもの少なくない。したがって「部分的には原点といえる」が、ひとくくりで「奈良は日本の原点」とは言えない。「原点」とはそれ自体で、特別な価値を持つものである限り、それぞれ個別に丁寧に扱うべきだろう。

20

奈良の「昔と今がどう繋がり、関係しているのか」この哲学的問いに挑んだのが、椎木琉加（1年生）である。「昔からずっとそこに存在」するものは、はたして「ずっと変わらず存在」しているのか、それとも「周りの環境に順応」したからこそ「地域の人々に受け入れられている」のか。椎木はこの極めて抽象度の高い難問を、「猿沢池」・「餅飯殿センター街」・「奈良国立博物館」・「念仏寺山古墳」といった具体の対象物で解を求めていく。結論はこうだ。

「昔と今が繋がったり、時には途切れたり、危機を迎えたりにしながらも、それぞれの場所や空間が『奈良』という地域に溶け込みながらも主張し合い、新たな奈良を継続的に作り上げ」、つねにそのプロセスの中にある。この解が描く像は、個々をばらばらに見たときの直線的で静的なものではない。奈良という広がりを持った空間の中で、池・商店街・博物館・古墳といった、一見無関係な各要素が、相互に依存と反発を繰り返しながら、不変と変化の間を行き来する、複雑でダイナミックな、文化コンテンツ本来の存在のあり方である。

## 21

寺尾南美（1年生）は、あらためて「奈良県の伝統」を考えた。そのアプローチはユニークだ。

「伝統をどのように受け継ぐのか」を、今日「奈良といえば」ですぐ浮かぶ「名産物」や「行事」から、逆行して探ろうというのだ。例えば「野生動物」のシカが、なぜ「奈良の鹿」として親しまれるのか。「奈良の鹿」の特徴は「芝を最も重要なエサとしている」ところにある。この「他地域の野生の日本シカに見られない「芝に強く依存する点」が「奈良独自の鹿」を育てあげ、「現在まで奈良の人々に愛されてき」ている理由ではないか。例えば、「奈良の柿の葉寿司」。もともと「東熊野街道沿いの吉野郡の各地で伝統的につくられていた郷土料理の一つ」で、いわば「保存食」だった。これが「グルメ・名産品として親しまれ」るようになったのは、「鯖以外の魚の種類も増」えたように「時代に応じて変化させてい」ったからではないか。当然ながら何もないところから忽然と「伝統」は生まれない。そして「伝統を残していく、という意識」がなければ、継承は覚束ない。しかし、一方で「変化を恐れ」ず「時代に応じて進化させること」がなければ、伝統は生き残れないのではないか。「若い世代へと語り継ぐ」のは、そのためにも重要で、「後世へと受け継がれていく」のは、何より「新しい伝統の形」をつくり続けていくという「伝統意識」なのではないか。

## 22

土居里歌（1年生）は、「奈良に存在し続けるもの」に注目し、その理由を確めようとした。「団扇はわざわざ買わないという人が多い」だろうに、「奈良団扇」は存在し続けている。何よりの魅力はその「美しさ」だが、さらに「受け継がれてきた技術や型」を基礎に「時代にあわせて新しいものも作りだしている」からだ。ふだんの生活で筆で字を書くことは滅多にないが「奈良筆」は存在し続けている。「使い勝手の良い、希望通りの筆を作る」ことのできる「信頼できる職人」が、「良い筆」を作ることへの熱意と信念を失っていないからだ。「1日かけても男女一対の手のひらサイズの人形もできない」が、それでも「奈良人形」は存在し続けている。「刀を研ぐこと」、そして「実際の能の舞」の「イメージを頭に叩き込む」ための長い修行も厭わない、「職人の人生をかけた技術」が消失を食い止めているのだ。存続の理由はそれぞれ違う。だが、共通していることがある。「それは人の思いである。」存続し続けるものには、伝統の保守や革新、いや「伝統」という意識すら超えて、それ「そのものを愛し、大事にしてきた」人がいたのである。

## 23

南里真帆（1年生）は、もの・ことよりも「なぜ」にこだわった。「なぜそのような歴史が起こったのか」の問いを、「なぜ有名建造物は建てられたのか」に収斂させて考察した。結論を先取りすれば、その根底には「世界に向けた思い」があった。「興福寺」も「東大寺」も、その先の時代の「法隆寺」も、明治に創建された「橿原神宮」ばかりか、昭和期の「奈良少年刑務所」でさえ、国際社会や国際情勢との関わりで「建てられた」のだ。明治の維新政府の懸案は、ほぼ「不平等条約」の「改正」に尽きる。他に先駆けた「１９０１年」の『旧奈良監獄』の建築」も、日本の「近代化をアピール」するためだった。その奈良監獄が「太平洋戦争の終戦翌年」に『奈良少年刑務所』と改称されたのは、「戦後の混乱期に起こった少年犯罪への対応に注力するためだった。歴史的使命を終えた奈良少年刑務所は「廃庁」されて「２０２１年にホテル」となる。奈良の国際観光の担い手として「生まれ変わる」のだ。

## 24

福永萌恵（1年生）は、奈良の「お土産」が「食べ物中心ではなく工芸品などのモノが多」いと気付いた。確かにそれらは「伝統的な工芸品」ではあるが、しかし「同じようなものは日本ならどこでも手に入る」ものでもある。「奈良団扇」はそのような奈良の「お土産」の代表のように思えた。さっそく「唯一の奈良団扇・扇子の専門店」である「角振町三条通りにある池田含香堂」を訪ねた。もともと奈良団扇は「春日神社の社人」の描く絵入りの団扇だった。いま最大の特徴となっている「透かし彫り」は、「明治の初め」に開発されたもので、「20枚の紙を重ねて小刀で突き彫りすることで模様を」浮かび上がらせる技法による。非常に美しい団扇だが「ほかの地域の飾り団扇のように置いて飾っておくだけのものではない。「骨」は「細く」て「しなやか」で、しかも「丈夫」だから「実用性も兼ね備えている。」モノ本来の機能と美が、高い次元で両立している。これこそ「奈良筆」でも「奈良一刀彫」にも共通する、奈良の「お土産」の特徴なのだ。観光客とは、言うなれば一見の客に過ぎない。それでも一切手抜きをしない、観光地としての良心と職人的矜持とが、奈良の「お土産」を支えているのである。

## 25

西川愛里（4年生）は、「和やか」で「ゆったり」という単調な奈良の観光イメージに疑問を抱き、真逆の「ギャップ」を探して「鬼」に行き着いた。興福寺東金堂で「脇役として中世」以来ずっと「四天王立像に踏みつけられている邪鬼」を、「少しは見習いたい」とユニークに評価し、「東大寺大仏殿」では「大きさも迫力もあ」る「多聞天」の「台座が鬼になっていることに気付」く。しかし「観光客は上ばかりを向いて」いて誰も台座の鬼を見ようとしないと嘆息する。そして鬼の探索は、奈良の魅力の源泉が単体ではなく、「何百何千ものさまざまな要素」が「組み合わ」さったものとの発見に結びついた。

## 26

福井桃葉（1年生）は、なぜ「奈良のイメージ」は「鹿と大仏」なのか、なぜ「鹿と大仏のイメージだけが広がっていったのか」が気になった。歴史を調べてみたが、「奈良のイメージを明確にした決定的な出来事は見つけることはできな」い。あるいは、奈良が「日本における旅行の始まり」とされる「伊勢神宮への参拝」すなわち「伊勢参りの道筋」にあったからかもしれない。「徒歩で旅をする」かぎり、途中で「食事」や「寝泊まりする」場所が確実に必要だからだ。その際「大きな見応えのある大仏とあちこちにいる可愛らしい鹿」という2つのコンテンツが楽しめることも「記憶の中に焼き付けられ帰った後も、印象に残る」のではないか。後世における「修学旅行」でも「時間がなく奈良公園周辺にしか行」けない場合が多いことが、「奈良といえば『鹿と大仏』というイメージ」形成に繋がっているのではないか。逆にいえば、奈良の観光が今も昔も「奈良公園周辺の地域に片寄ってしまっている」のだ。さて「インバウンドが急激に増加している」中、「外国人」の奈良イメージもやはり「鹿と大仏」なのだろうか。福井にとって気になるところだ。